

あら い りゅう いち
荒井隆一さん

修士課程
教育コミュニケーションコース2年

昭和47(1972)年、神戸市生まれ。平成7(1995)年兵庫県の公立小学校教員に。25(2013)年、大学院に入学。三田市立武庫小学校で6年生を担当していた24(2012)年度の教育実践をまとめた論文「自己肯定感を高めるフィールド総合の実践」で今年7月、第63回読売教育賞を受賞した。

第63回 読売教育賞表彰式



◎読売教育賞とは
昭和27(1952)年創設。全国の教育者・団体を対象に13部門で教育実践の論文・募集し、優れたものを表彰する。荒井さんの論文は生活科・総合学習部門で最優秀賞に選ばれた。

キラリな人
SHINY PERSON

**児童を信じる
大切さを
あらためて
実感しました**

現

任校で6年生を担当していた当時の修学旅行での教育実践をまとめた論文で今年7月、読売教育賞を受賞した。20年近い教員生活で最も対応に苦慮した学年だったというが、「子どもが日に日に成長する姿を目の当たりにし、ぜひ記録しておきたいと大学院入学後に書き始めました」。

その学年は3年生時に学級崩壊が起きるなど、児童の問題行動が常態化。自己肯定感を調べる校内アンケートでは、自分に自信が持てない子どもが他学年よりも多いという結果が出た。6年生に進級時、「何とか自信をつけて卒業させたい」と担任を志願。他の担任とも話し合い、「児童に、やればできるを実感させる」という目標を立て、行事のたびに児童たちで何をするかを話し合わせ、そこで出たアイデアは必ず実行させた。

「どんな些細なことでも成功すれば褒め、自信を持てるよう

にしました」

論文に取り上げた9月の広島への修学旅行でも、児童たちが観光スポットを調べ、それを基に行程を組んだ。被爆者の体験談に心打たれた児童たちは旅行後、劇や紙芝居で平和の尊さを伝えるイベントを自主的に企画し、12月に開催した。「準備を進める彼らの表情は生き生きとし、4月ごろと比べて目の輝きが明らかに違いました」

一連の実践から、教員にとって児童の可能性を信じるのが大切だと語る。「問題行動を起こす子どもでも必ず良くなると信じて接すれば、向こうもこちらの思いに気付く、悪い方へ向けていた力を良い方へ注ぐようになります」

校内の問題の多くは教員と児童生徒との関係が良好でないことに起因すると気付いた今、大学院では教員と子どもの在り方について研究に励んでいる。